

まちからみた川への期待

人々は古くより川と深い関わりを持っていたことから、まちは主に水辺に発達してきたが、近代の産業社会システムによる都市活動の大規模化・広域化により、今ではまちは川とかけ離れて拡大発展し、直接的結びつきを失ったかのように思われる。

しかしながら人々は水との関係を無くせるものではなく、近年の地域アイデンティティの高揚や社会資本の量的充足とともに質の向上を求める動機から、優れた都市環境形成をめざして水空間の整備に多くの期待を持つようになった。このことは従来、居住空間に代表される私的空間と道路、公園、川に代表される公共空間の整備が別の論理で進められてきたのに対し、近時の都市空間の整備について、私的空間と公共空間を組合せた総合的な居住環境整備の方向をめざしていることの一環として把えることもできる。

もとより、まちづくりから川を論じるとき、人々の日常生活の安全と安定を確保することが最重要な目標であることから、水の制御（治水）の視点を欠いてはならないことは言うまでもない。したがって親水、用水よりも治水に重点を置いてきたことも当然の選択であった。しかしながら水害の相対的減少が、人々の関心を水辺に引きつけたことも事実で、人々と水の距離を近づけることは防災対策を前提としつつ、今後大いに進めなければならない方向であるといえる。

川はまちづくりの重要な要素である。しかし今日の産業社会システムのもとにあつては、人間のスケールでみた空間及び環境面での川に対する評価は高まっているものの、まち全体からみた川の存在（その空間的、機能的存在）については、いまだ明解な方向が示されていないといつてよい。

現在、スーパー堤防整備事業、レイクタウン事業等のように、川と市街地の一体的整備方策が検討されているが、このような整備上の観点からの取組みもさることながら、それに先立ち計画上の観点に立ったまちづくりと川のあり方こそ本質的に検討しなければならない課題ではなかろうか。たとえば都市計画において、川は山や海と同様、計画策定の自然的条件として与件とされ、川の存在とそのあり方がまちづくりの計画要素として意識されることは薄い。もちろん土地利用計画等において水辺環境に配慮することはあるが、それは現存する自然的条件を計画の中に同化させる姿勢であつて川全体を積極的に位置付けるものではない。

川そのものが他の都市公共施設と同様に重要な公共空間であるならば、都市計画の広域的、総合的視点に立った位置付けとこれに基づく計画的な水辺空間整備の方策を確立することが望まれる。

